JICA地球ひろば・研究所共催セミナー詳録

中米の風土病＜シャーガス病＞との闘いと青年海外協力隊

－協力隊員は現場で何を見て、どう行動したのか－

日時:　2013 年 4 月 11 日（木） 18 時 30 分～20 時 30 分

場所:　JICA 市ヶ谷ビル 6 階セミナールーム

発表者:

橋本謙（はしもとけん）	JICA 中米シャーガス病対策広域アドバイザー
山内志乃（やまうちしの）	元ホンジュラス青年海外協力隊員（感染症対策）
溜宣子（たまりのりこ）	元ホンジュラス青年海外協力隊員（感染症対策）
江越健太郎（えごしけんたろう）	元グアテマラ青年海外協力隊員（感染症対策）
谷口翠（たにぐちみどり）	元エルサルバドル青年海外協力隊員（感染症対策）
小笠原禎（おがさわらただし）	元ホンジュラス青年海外協力隊員（感染症対策）

1. 冒頭挨拶

司会（地球ひろば）　本日は JICA 研究所・地球ひろば共催セミナーに多数のご来場いただきまして、誠にありがとうございます。年度変わりまして第 1 回目のセミナーは、中米の風土病。皆さん聞いたことはありますか？　シャーガス病という、風土病のセミナーを行います。現場でご活動されておりました、青年海外協力隊員の活動や、またプロジェクトの模様を、本日のセミナーでは皆さんにお聞きいただきます。きょうのセミナー、講師のご紹介をさせていただきます。JICA 中米シャーガス病対策広域アドバイザーを務められております、橋本謙さま、どうぞよろしくお願いします。今日のクロストークのファシリテーションを行っていただきます。また向かって、右側から、山内さま。よろしくお願いします。

山内　よろしくお願いします。

司会（地球ひろば）　溜さま、どうぞよろしくお願いします。

溜　よろしくお願いします。

司会（地球ひろば）　江越さま。

江越　よろしくお願いします。

司会（地球ひろば）　谷口さま。

谷口　よろしくお願いします。

司会（地球ひろば）　小笠原さま。

小笠原　よろしくお願いします。

司会（地球ひろば）　こちら 6 名の方を講師にお迎えしまして、お話をいただきます。全体の質疑応答を入れまして、8 時半までのセミナーになります。プレゼンテーションやクロストークなどを交えながら行ってまいります。どうぞ皆さん、お楽しみください。それでは、本セミナーの開催に先立ちまして、当国際協力機構、細野シニアリサーチアドバイザーより、冒頭ごあいさつをいただきます。細野先生、どうぞよろしくお願い致します。

細野　本日は、この JICA 研究所と地球ひろば共

催のセミナーに、多数の皆さまにお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。心から御礼申し上げます。堅苦しいごあいさつは抜きにしましてですね、私自身も、エルサルバドル、それから近隣国のホンジュラス、グアテマラ、たびたび行きましてですね。エルサルバドルにも5年間おりました。で、この5年間のあいだ、この、今ずっと待っているあいだに上映されていたビデオにあったような、シャーガス病のある村々もずいぶん訪問しました。これはあの、草の根無償などのイベントの機会に村に行った、そういったことになります。そういう意味で、私もかなりシャーガス病に強い関心をもっておりますけれども。きょうはまず、シャーガス病はなんで感染するか。これは皆さん、そこにも出てたんですけども、「サシガメ」と。日本ではサシガメなんですが、スペイン語では「チンチェ（chinche）」、あるいは「チンチェ・ピクーダ（chinche picuda）」と。しかしですね、私はいろんな外国でもシャーガス病との闘い、そして、JICA のそのための闘いの協力、というのをずいぶん講演するんですけども。英米の方には、サシガメは「Kissing Bug」、「Kissing Bug」って言われております。キスする虫という。キス虫、ということで。「Kissing Bug」っていうと、アメリカの方々はハッとしてですね、非常に、急に興味を持ちだすわけです。で、興味持っていただかなきゃいけないのは、実はこの Kissing Bug によるシャーガス病は決して、例えば、アメリカやヨーロッパで、このシャーガス病にかからないという保証はないということなんですね。Kissing Bug という名前で興味を持っていただくんじゃ困るんであって、シャーガス病という非常に怖い病気、それが貧しい人たちを直撃する、と。この貧しい人たちだけにしかほとんどうつらないので、欧米のドナーはほとんど興味を持ってこなかった、関心を持ってこなかったと。しかし、実はアメリカを含めて、決して安心できない状況にある。これはですね、シャーガス病にかかった方が、中米からアメリカに、多数、いわば不法入国するわけですね。そういった人たちは非常に貧しいので、血液を売ります。ところが、この血液の中に、シャーガス病の寄生虫がいるわけです。しかし、アメリカやヨーロッパでは、シャーガス病を知らない。知らないので、血液の売買でシャーガス病のチェックをしないわけです。ですから、全く安心できない。しかしこういうふうに申し上げると、本当かな？　と、皆さん思われるかもしれませんが、本当なんですね。というのは、非常にこの怖い現実について、アメリカで映画が作られました。その映画は、中米なんかでも上映されたんですけれども。これは、エルサルバドルからアメリカに移住した人が1人、その映画の主人公になるわけですけども。その映画が終わるころに、シャーガス病で亡くなられるんですね。その間、どういうふうに血液が売られているかとか、そういったことが非常に詳細に描かれ、非常に感動的な映画であります。このことを実は私は、皆さんの協力隊員の方々の先輩である大田享子さんから聞いたんですね。これを聞いてさっそく、この映画監督をお招きして、エルサルバドルの教育テレビの番組に出演していただきました。詳しくは、この本の前書きにちょっと私書かせていただきましたので、ご覧いただければと思いますけども。テレビ番組で、そういういろいろしなければならないぐらい、例えばエルサルバドルの都会のお金持ちの方は知らないです。そういう意味では、私は、JICA の長期にわたる貢献、協力の結果。サシガメの外来種については、シャーガス病感染の中断を実現した、達成した、これは JICA の重要な貢献であると思います。しかしこの、重要な貢献にも関わらず、シャーガス病を発見した、いわゆる「シャーガス病」っていうのはブラジルのシャーガス博士が発見したので「シャーガス病」と言われるんですけども。シャーガス博士生誕100周年の時に、ロン

ドンのご承知の有名な雑誌エコノミストが特集の記事を出します。この記事の中で、なんとカナダの協力だけが中米で行われているかのように紹介されていまして、日本の JICA の協力は全く紹介されていませんでした。この外来種による中断、感染の中断を実現したという大変な快挙、これが、残念ながら日本でもあるいは海外でもあまり知られていないということが、私非常に残念に現地で思っておりました。今回この本の出版で、シャーガス病対策の協力の記憶がしっかりと残されるということになったのは、大変素晴らしいと思っております。それを記念するような形で、この開かれたセミナーが、実り多いものになりますように、大いに期待を致しまして、簡単ではございますけれども、主催者を代表してのごあいさつにかえさせていただきます。どうも、ありがとうございました。

司会（地球ひろば）　細野先生、どうもありがとうございました。それでは、講師の皆さん、ご準備よろしいでしょうか。では、橋本さん、どうぞよろしくお願い致します。

2.「中米におけるシャーガス病とその対策、日本の協力」（橋本謙氏による発表）

橋本　ご紹介いただきました、橋本謙です。よろしくお願い致します。今日、われわれ 5 人のパネラーと、私橋本は、シャーガス病対策のユニフォームを着ております。このようなユニフォームを着て現場で活動しているんです。これを着ると、ちょっと変身したようなイメージで現場活動に取り組むことができると、私は感じています(笑)皆さん、ところで「シャーガス病」って、お聞きになったことありますか？　ま、その仕事をされている方はお聞きになったことあると思うんですが、大半の方は日本であまり耳にされないかと思います。今日は、その意味で、駆け足になりますがシャーガス病とは何か、そして、その対策、日本の協力ということについて、簡単にお話しさせていただきます。

これは中米の風景の一つで、グアテマラの国境からエルサルバドルを見た時の風景です（スライド３）。だいたい、この辺の地域の 80%は山岳地帯で、日本とよく似た景色が見渡せます。これは、先住民族の一つのチョルティ族といって、このような方たちが、貧しい地域に住んでおります。これもグアテマラの写真で、彼らはシャーガス病にかかる可能性が高いこのような家に住んでいます。ここにお金が載せられていますが。これはブラジルの通貨で、昔の旧通貨でクルザードスです（スライド４）。この方が、カルロス・シャーガス先生、およそ 100 年前にシャーガス病の病原体を発見した方です。このように、顕微鏡をのぞきこんで発見されました。そのシャーガス先生の名前をうけて、付けられた病名がシャーガス病です。

症状として、大きく分けて二つ。二期にわたって起きます（スライド５）。一つは、潜伏期が 1、2 週間続いたあと、急性期が 6 から 8 週間。ま、そこで、発熱とか局所リンパ節が大きくなったり、虫に刺されたところ、まぶたが腫れたり、ということがありますが、これは 5%以下のケースでありまして、ほとんどが無症状。そして、慢性期に

なりますと、それがだいたい 5 年から 20 年後に、心臓が肥大したり、また食道、結腸が肥大したりするんです。これは、心臓の肥大する様子です。だんだんと大きくなっていって、それで息をするのがしんどくなってくる。風船をふくらませていくと、だんだんと伸縮できなくなってくる。それでまあ、心臓も同じでポンプ機能がなくなっていって、ある日突然コロッといってしまう。そういう心臓麻痺で死ぬケースが非常に多いです。その発症率は 30%から 40%と言われていまして、これは、個人の免疫力によったりとか、あとは病原体の性質によったりします。

診断・治療に関しまして、大きく分けて、診断法は二つあります（スライド６）。一つは人間の血から抗体を探してそれで検査して、研究室でその人が感染したかどうか、抗体を持っているかどうかっていうことを調べます。もう一つのほうは、原虫、実際に血液の中で病原体を探す方法です。これはマラリアでも使われる、ギムザ染色とかも使われます。治療は今のところ二つの薬剤がありまして、この特効薬で、病原体を殺すことができますが、60 日間も続けて飲むとか、あとは副作用があるとか、まだまだ改善の余地があります。また、この薬は普通の薬局で売ってないので、中米の人たち、中南米の人たちは直接アクセスができない。現在のところ、WHO や製薬会社などのドネーション（寄付）によって配られています。

シャーガス病の感染経路なんですが、もともと虫による媒介が多くて、およそ 80%の感染が、サシガメ、刺すカメムシによるものです（スライド７）。その次が輸血感染。そして、母子感染。残りが、経口、臓器移植、ラボによる事故など。対策が進むことによって、この割合は変わってきます。

シャーガス病がどのへんに蔓延しているか、という世界地図です（スライド８）。世界でおよそ 800 万から 900 万人の推定人口が感染していると言われています。この青色で示しているところで、媒介虫による感染があり、ほかのヨーロッパ、日本にも感染者がいます。これは、中南米からの移民や母子感染などによるもので、日本でもその治療や予防が最近始まっております。

シャーガス病の要因をざっと見ると、人畜共通感染症であるため、「宿主」の人間、フクロネズミ（英語でオポッサムと言います）、アルマジロ、あと犬も感染します（スライド９）。例えば、グアテマラだと 30、40%の犬が感染します。あと、フクロネズミもだいたい 40 から 60%感染しています。あと、「環境」。この、人が住んだり、虫が住む家ですね。それから「病原体」。これらの要素があって、感染症が成立します。

中米には大きく分けて二つの媒介虫がいます（スライド 10）。これ *Triatoma dimidiata*、*Rhodnius prolixus* とわれわれは呼んでいます。だいたい、サシガメ全部合わせると 130 種以上はありますが、中米でわれわれが対策の標的としていたのはこの 2 種。先ほど、細野さんもおっしゃっていましたが、一つの虫は消滅が可能。家の中だけに住んでいて、それを殺虫剤で殺虫することによって、消滅することができるのです。もう一つのこの *Triatoma dimidiata* は、屋外、あと、自然界にも住んでいるので、家の対策をしてもまた戻ってくる可能性があります。

これが、シャーガス病対策、JICA が行っていた、４カ国の状況です（スライド 11）。グアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラス、ニカラグアの、およそ多いところでホンジュラスだったら全人口の 49%が感染リスク地域に住んでいます。グアテマラ少ないところで 17%。推定値ですが、2006 年の状況によりますと、まだそれだけの感染リスクがあり、そして、実際に感染している人たちの数はご覧の通りで、およそ、グアテマラだと全人口の 2%、エルサルバドル、ホンジュラスだとこれが 3%。ニカラグアはだいたい 1%の割合です。

このシャーガス病に対してどのような対策を取

るか。大きく分けて二つあります（スライド 12）。一つは虫を駆除する。もう一つは、輸血の血液をスクリーニングすることです。中南米の血液銀行では、B 型肝炎、C 型肝炎、エイズ、梅毒といっしょに、シャーガス病も 100%検査することになっています。

われわれが行っていた、媒介虫対策、虫対策には、大きく分けて攻撃フェーズ、監視フェーズがあります（スライド 13）。攻撃フェーズでは、そこで虫の分布状況はどうなのか、人の感染具合はどうなのかをベースラインとして調べて、殺虫剤散布を行います。そして監視フェーズでは、住民によるサシガメの届け出、「ここにいますよ」と保健所に知らせていただいて、それに対して殺虫散布を行います。小さいうちに問題を解決していこう、広がらないうちに解決していこう、というような形で…。そして、最後に血清調査を行って、対策の効果を調べます。また、最初から最後まで終始一貫、「予防しよう」、という内容の啓発活動をします。

実際にこれが、サシガメを探しているところですね（スライド 14）。ここでは、血清調査で血を採っています。これは殺虫剤散布を行っているところで、これは啓発活動ですね。「予防しましょう」「サシガメを見つけたら届けてください」という場面です。このような予防策が重要で、いくら殺虫剤散布しても、しっかりと家の中を片づけたり、壁を修繕してないと、またサシガメ戻って来るのです。そこで、壁の修繕の研修もしました。あと家の片づけも促します。

これ、なんだか分かりますか？（スライド 15）実は、サシガメが壁の中に潜り込んで、とまっているところです。すごく見つけるのが大変です。こういうところにサシガメはひそんでいて、壁を直すことで、こういう問題を解決することができます。

日本は何をやってきたかですが、1990 年代から、サシガメ、またはシャーガス病の研究支援を始めました（スライド 16、17、18）。実際にグアテマラで、どれぐらいの虫がいて、どのような地域に広がっていて、どういう対策ができるのかという研究でした。その結果データをもとに、2000 年から対策がはじめられました。それと同時に、1997 年に中米シャーガス病イニシアチブっていうのが発足されて、中米全体でこの病気を減らすための国際目標が立てられ、これが政治的な追い風となりました。

このように始まった JICA プロジェクトは、グアテマラから攻撃フェーズで虫をまず減らし、その経験、モデルを、ホンジュラス、エルサルバドルに広げました。国のあいだで、いかに効率的に改善できるかというところに、焦点を置いた知識運営にも取り組んで。そして、監視フェーズ。サシガメの生息率が減った状況を、また元の黙阿弥にならないように監視する仕組みを作るプロジェクトを行いました。そして今ニカラグアでは、攻撃と監視フェーズを同時に進行しているところです。

そして、JICA の取り組みの中で、協力隊と専門家の短期・長期の派遣において、合計、協力隊はのべ 80 人以上、専門家も 75 名以上派遣されてきました。プロジェクトにおける日本人の活動内容は、マネジメントの支援でした。専門家が中央の保健省に配置され、そして、協力隊は現場活動を支援します。そこでグアテマラの経験をほかの国へ、また、ほかの国の経験もまたほかの隣国へ隊員、各国専門家、広域専門家により知識運営します。あと、実際にものとしては、殺虫剤、散布器、車両、血清検査キットなどのドネーション、あと教材・研修の経費も支援しています。

そして、このように、グアテマラの東部 4 県から始まったプロジェクトは、次第に、隣県隣国に広がっていって、今ではこのような 4 カ国で行われるようになっています。実際にこれが、今出て

いるのが、協力隊が派遣されたところなんですが。2000 年から・・・ま、いろんなところに派遣されました。そして現在も派遣されています。

プロジェクトが始まったその頃から、累計の殺虫剤散布家屋数がずっと伸びていると、いうような状況が見られます（スライド 19)。そして、その成果として、消滅ができるサシガメの分布図は 2000 年代前半から後半まで賑やかでしたが、2010 年には 3 集落 4 集落まで減りました（スライド 20)。もう一つ、消滅できないほうのサシガメですが、この虫が生息する家屋の割合も大幅に減りました（スライド 21)。

そして、成果として、こちらの消滅できる虫による感染の中断が、グアテマラ、ホンジュラス、ニカラグアで国際認定されました（スライド 22)。エルサルバドルも同じ虫が消滅したという国際認定をうけました。そして、もう 1 個の消滅できないサシガメも減りました。その結果として、1990 年代後半から 2006 年の間に、推定感染数がおよそ半減し、新規感染者数もおよそ 6 分の 1 に減った、というような成果が得られています。このような成果を得るには、もちろん JICA の努力だけじゃなくて、ほかの国際機関、米州保健機関、またもちろん保健省、そして大学機関、研究機関のいろいろな貢献がありましたが、協力隊の存在が不可欠でした。協力隊の皆さんは、当初はシャーガス病対策の知識も経験はなく、中米、海外にも行ったこともないような人たちもたくさんいました。私も含めて、ド素人でした。でも、どうしてそれが大事だったか、実際に彼らがどういうことをされたか、ということについて、今からお話を聞いていきたいと思います。いったん、私のプレゼンは終わりです。(拍手)

3. クロストーク「協力隊員は現場で何を見て、どう行動したのか？」

《自己紹介》

橋本　それではあの、山内さんから、順番に。現地での活動を、「調子グラフ」っていう形で、2 年間をザッと見せていただいて、それについてお話をいただいたあと、皆さん 1 人ずつ発表していただいて、意見交換をしたいと思います。まず、自己紹介からはじめてください。

▲山内隊員の活動　（山内志乃さんご提供）

山内　ただいまご紹介いただきましたが、私、山内志乃と申します。派遣国はホンジュラスでした。今のお話で、攻撃フェーズとしてグラフに出てましたけれど、私は、その真っただ中の 2004 年から 2006 年までの 2 年間活動しておりました。赴任地は、グアテマラの国境に近い、コパン県ですね。皆さん、ご存じではないかと思いますが、コパン遺跡で有名な、あのコパン県です。ここは、あの星の付いてるところですね。ほとんどグアテマラのようなとこです。チョルティ族という、左下の写真に写ってる、ワンピース姿の女性がそうなんですけれども、先住民、マヤ文明の末裔ですね、こういった方々が小さく暮らしているようなところで活動を致しておりました。私は茨城県の出身

でして、活動を開始した時は 32 歳でした。この面々から見ても、わりと遅いスタートではあったかなというふうに今振り返っても思っております。よろしくお願いします。

溜　続きまして、私、溜宣子と申します。赴任国は山内さんと同じホンジュラスに、2006 年から 2008 年、ちょうどフェーズですとワンからツーに移るあいだの 3 年間、ホンジュラスに赴任しておりました。出身地は大阪府です。派遣された頃の年齢は、私、よく若く見られて、今はそんなに若くないんですが、24 歳で大学卒業してから、新卒で協力隊に参加をしました。おもな活動は、紹介文やこちらのスライドの写真にもあるように、協力隊員と一緒に、啓発活動としての演劇を作成して、現地の同僚とともに啓発活動を行っておりました。そういった話をきょうはできればと思います。よろしくお願い致します。

▲溜隊員の活動（溜宣子さんご提供）

江越　あらためまして、江越健太郎と申します。私は、2009 年の 12 月から 2011 年の 12 月まで 2 年間、グアテマラという国に派遣されておりました。グアテマラのですね、チキムラ県チキムラ市というところで、「ムラ」と付いているんですけど「市」なんですね。チキムラという市でございまして(笑)　で、こちらのほうの保健所に配属になりました。私は、先ほど橋本さんから解説のありました、攻撃フェーズと監視フェーズのうち、もう虫がある程度減って、どうやってその虫の数を抑えていくか、という監視フェーズの段階で派遣されました。私自身は、生まれは兵庫県出身なんですけれども、派遣の時は長く神奈川に住んでおりましたので、神奈川出身として赴任いたしました。赴任の時は、32 歳で、それまでサラリーマンをしておりました。で、帰国してからまたサラリーマンの生活に戻っております。今回お集まりの方々は、いろいろなバックグラウンドをお持ちであったり、進路のことも考えてらっしゃる方もいると思うんですけれども、そういった（進路の）お話でも、時間共有できればと思っております。よろしくお願いします。

▲江越隊員の活動（江越健太郎さんご提供）

谷口　皆さん、こんばんは。谷口翠と申します。私は、エルサルバドルという国に、2010 年から 2012 年の 3 月まで派遣されていました。同じく監視フェーズがちょうど終わる、日本のプロジェクトがちょうど終わる時期に、エルサルバドルにいました。出身は大阪ですけれども。江越さん風に言うと、行く時は奈良県にいたので、奈良出身になるのかなあ、と思います(笑)　行った時の年齢は 27 歳で、それまではサラリーマンをしていました。私の赴任地のエルサルバドルのアウアチャパ

ンなんですけれども、写真にあるような、市場があるような地方都市で。標高は比較的高くて、コーヒーの生産が盛んでした。日本では「カルディ」ってコーヒーの試飲ができるお店があると思うんですけども。そこでエルサルバドルのコーヒーが売ってることがありますが、それはアウアチャパンでできたものであることが多いので、ぜひ、皆さん、見かけたら買ってください。きょうは、皆さんといろいろなお話しできるのを楽しみにしています。よろしくお願いいたします。

▲谷口隊員の活動（谷口翠さんご提供）

小笠原　こんばんは。小笠原禎と申します。私は2004 年から 2006 年まで、山内さんと溜さんと一緒で、ホンジュラスのほうで活動をしておりました。赴任当時の年齢は 26 歳でした。赴任先が、これも山内さんと一緒の､コパン県というところの、サンタ・ロサ・デ・コパンというところで、標高が 1,200 メートルくらいあって。真冬はちょっと寒いようなところで、一応、ホンジュラス政府の中心都市みたいな形だったので、それなりに開けた街であって、映画館とか、中華料理屋とかもあって。この中ではわりといい生活をしていたのかなと思います(笑)　今日はどうぞ、よろしくお願い致します。

▲殺虫剤散布活動（小笠原禎さんご提供）

《協力隊応募の動機》

橋本　いくつか質問をしていきたいと思います。赴任された時の活動の内容に入る前に、赴任のキッカケというか。どうして協力隊に参加されたかという点について、お一人ずつ簡単にお聞きしたいと思います。山内さん。

山内　私は、赴任直前までは、東京都内の郵便局に勤めておりました。バリバリ公務員で、何不自由もない生活。将来もそれなりに、なんていうんでしょう、保証されているといいますか。そのような状態の中で、協力隊員参加を決めたわけなんです。なんというんでしょう、いろいろ恵まれた環境にいると､それを失うことが怖くなるもので。海外旅行をわりと趣味としていたんですけれども、そういった中で、何も持たない中で、失う恐れのない、といいますか、勝手な見方なんですけれども、そういった現地の方々や、協力隊の方なんかにもお会いして、どこか憧れというか、そういう自分になりたいなと感じておりました。そんな時に、協力隊に関しては以前から見聞きしていたのですが、「行きたいね」なんて友人と話しながら、それを実現しないでいる自分に嫌気がさしたというか、夢を持つのはいいことなんですけれども、実現しないことにはやはり現実は変わらないのだ

ということに、いつかふっと気がつきまして。その時に、頭に浮かんだ小さなことを一つ一つ実現していこうという、小さなゲームをはじめることにしたんですね。その一つが、協力隊の応募でした。合格ではなく、ただの応募だったんですが、それが、なぜかうまく通りまして、気がついたらホンジュラスに足を下ろしていたという、そういった感じで私の 2 年間は始まりました。

溜　私は、先ほどもお伝えした通り、新卒での参加でした。初め、大学では医療系の臨床検査技師の勉強をしていました。入学した当時から機械化が進んで、病院実習をしても狭い部屋でずっと同じことをしていて、このまま就職するのは面白くないなというふうにずっと感じていました。そういう時に、たまたまタイのスタディツアーに参加をして、そこで、現地の生活を見て、旅行ではなく、言葉が分からないままホームステイをしたり JICA のプロジェクトを見せていただく機会もあったりして、なんてこう、文化や言葉が違う人たちの生活を見るのがすごく面白いんだろうと思ったんですね。その時に、ボランティアとか、国際保健とか、そういったキーワードが頭の中にありまして。それで医療系の大学を卒業してからすぐ、編入学をしてボランティア学という学問を学ぼうと思い大学に編入しました。そうした中で、もっともっと現地の言葉を学んで、長い期間、旅ではなくて現地の中に住むことで、人々の生活を見てみたいという気持ちが大きくなりました。それで、協力隊のことを偶然知ることがあったので、応募しました。ですので、何か人助けをしたいとか、そういったことではなくて、現地の中に入り込んで、言葉を知って、人々の生活を見てみたいっていうことが、応募の動機でした。以上です。

江越　私の場合は、2003 年に大学を卒業しまして、最初、総合化学メーカーの営業の仕事をしておりました。医薬品を担当しておりまして、病院とかクリニックにお邪魔する仕事だったんですけれども。大学時代の後輩に、フィリピンに青年海外協力隊のボランティアで行っている友達がおりまして、2006 年くらいに、1 回遊びに来てくださいよ、と言われましたので、その後輩のいるフィリピンに遊びに行きました。その時に彼がやっている活動を見せてもらうキッカケがありました。彼は獣医の職をしておりました。私もバックグラウンドは獣医学なんですけれども、獣医にこだわるつもりはなく、(大学卒業後は) サラリーマンとして就職していたわけなんです。けれど、異国の地で 1 人で活動をしている彼の姿に、感動っていうか心を打たれまして、また、自分自身が大学時代、感染症のことを多少勉強して、貧しい国ではけっこう薬が届かないところで、多くの人が亡くなってるという現状も多少聞いていたものですから、なんか自分にできることがあればしたいな、という気持ちがだんだん芽生えました。しかも、(青年海外協力隊は)ボランティアと最初聞いていたので、正直、大学をようやく卒業するのに給料をもらえないというのはつらいな、と思っていたんですけれども、JICA の制度として、ボランティアといっても現地での生活費というのは現地水準ですけれどもいただけるということでしたので、それならばということで、自分自身決意が固まってきました。それで、あとは会社を辞めるタイミングというのが非常に迷ったんですが、ずるずるといっても仕方ないですし、あとは、私 32 歳で派遣だったんですけど、結構周りの人皆さんが結婚して、家庭を持ってきてですね、私は、婚活をしなきゃ、婚活をしなきゃとういう気持ちもあって。ま、今もしてますけれども(一同笑い)　そんな中で、逆に結婚してしまったら青年海外協力隊で行くのはなかなか難しいだろう、フリーのあいだに、エイヤーで応募しようということで、決意を決めて応募していったという形でございます。

谷口　私は、大学では、臨床検査、溜さんと一緒の臨床検査を勉強していたんですが、すごく採血が苦手で、採血をしなくていいような無侵襲の臨床検査の機械、無侵襲でいろいろな検査ができる装置ができたらいいなと思って、大学を卒業してからは、メーカーに入って臨床検査装置の研究開発をしていました。もともと海外にはいつか行ってみたい、研究でもいいし、何か世界を見に行ける機会があったらいいなというのは、あったんですけれども、なかなかそういう機会もなく、会社でずっと研究をしていました。そんな時に電車で協力隊のパンフレットを見て、こういうので海外に行くチャンスもあるんだなと思い、インターネットで協力隊応募のところを見ましたら、感染症対策という部分では､自分の学んだ医学だったり、会社での経験が生かせたりする、そういう分野にも募集はあるなあと思って。もし応募して合格すれば、これは行けということだからと思って、応募をしました。

小笠原　私の場合ですが、大学時代にアメリカに１年ちょっと留学して、そこでボランティアみたいなことをしていて、国際協力に興味を持つようになりました。大学卒業してから、社会人として働いていましたが、働きながら、国際協力やってみたいという思いがあって、そのためには取りあえず、Master Degree を取る必要があるのではないかと思いました。お金ためてから大学院に行こうと思っていたんですけども、現場経験が無いのに何を学べるかなっていうのがありました。そういった時に､NGO か JOCV 青年海外協力隊かという選択肢があって､私は青年海外協力隊を選んで､2 年間ホンジュラスで活動しました。

《2年間調子グラフで活動を振り返る》

橋本　それじゃ、1 人ずつ、すいません、先ほどちょっとお話ししましたが。2 年間を振り返っていただいて、現地でどのような活動をされて、そしてその時にどう感じられたかという、総括みたいな形で、調子グラフを見ながら話していただきたいと思います。

山内　では、説明をさせていただきます。一番皆さんから見て、右手が私のグラフです。ほんとにこう、V 字型といいますか、活動の中が一番安定しているんではないかなというこの頃が、一番の底辺に近いような、そのような状態でした。最初の、上がっている部分っていうのは最初 3 カ月ぐらいまでですかね。半年までまだそうだったかもしれないんですが、なんでもかんでも、見るものが目新しいんですよ。なので、大したことをしてなくても、もう、やる気マックスっていう感じの時期でした。学んできたスペイン語もいろいろ試してみて､「あ、通じた、通じた！」っていう喜びに満ちていた頃だったんですね。で、慣れてくると、もっともっとっていう気持ちが出てきます。その気持ちに実際の活動が追いついていないということで、だんだん下がってきたわけですね。それで、このあたりもストライキなんかさっそく入りましたでしょうか｡そういうこともありまして。こんなに時期がたったのに全然動けてないということで、もっともっと下がっていきました。この赴任 1 年目という頃が、12 月ですね。で、ホンジュラスでは､12 月から 2 月くらいまでのクリスマスとニューイヤーのあたりをあわせて保健省などの動きが止まってしまうんですよ。ですので、私の活動もこのあたりはトーンダウンしてしまい、ちょっとやる気は失います。で、さあ、やり出すぞと思った頃に、私、牛と衝突をしてケガをしてしまったんです。それで、活動が、描いてたものが急にできなくなってしまったということで、このあたりはもう、かなりやる気がなくなっていました。「もう私の 2 年目は終わりだ」と。そんなふ

うに思っていました。そして、そちらも完治して、できることをやっていこう、と。で、最後のこの上がり具合はなんだったのだろうということなんですが、ここまでのあいだはプロジェクトの流れに乗っかってそれに応じて仕事をしていったような感じで、本当に自分がやりたかったことというのは実感として進められていなかった感じだったんですね。それを、最後 2 年間という期限が迫ってきた時に、本当に私このままでいいのかと考え直し、やっとここでチョルティ族の村落の家庭訪問という、本当にやりたかったことを見つけて。最初から、企画から実行からまとめまですべて行ったという、一番その盛り上がった時だったんです。そういった状態で 2 年間終えて、戻ってきた、というわけです。以上でございます。

橋本　ちょっといいですか。簡単にプロジェクトの活動を体現されてたという話なんですけれども。例えば、どういう活動ですか、プロジェクトの活動というのは。

山内　攻撃フェーズの中でありましたので、殺虫剤散布ですね。チョルティ族の集落の方々に、殺虫剤をしてもらうために、してもらうのに同行をして、そのあたりを監視していたり。それから啓発活動ですね。各村に行って、シャーガス病に対して、どう気をつけたらいいのか、というような教育活動ですね。そういったことを出向いて行っていたわけです。ただし、それは私が計画をしてしたわけではなくて、プロジェクトの動きの中で、この時期にはこれをしようというのがありましたから。カウンターパートという、現地で私が一番そばで一緒に仕事をする同僚なんですが、その人に、どちらかというとくっついて行って、仕事をしていたような、そんな具合でした。

橋本　ありがとうございます。では続いて溜さん、お願いします。

溜　私は、グラフを見ていただいたら分かりますように、ここらへんで葛藤しているというところが、なみなみな線になっていて、そういうところが 2 回あるんですね。初めは赴任国に入った時で、ここですね、見るものすべてが楽しかった一方で、現地の語学訓練があった頃です。日本での語学訓練は、すごく楽しくて、学ぶ楽しさというものがあったんですけど、現地に入るとあまり語学訓練が楽しくなかったので、ガンと調子が落ちました。ですが、少し調子が上がって任地に赴任した。自分の赴任地に赴任した時にまた調子が上がって、それは、やっぱり見るものもが楽しいなと思ったからなんです。それからまたいったん落ちたんですね。これは、言葉が通じないというむなしさというか、そういったことに悩みました。しゃべっても、わからなければ、現地の人ってすごく素直で、分からないって顔をされたりして、そうされるとなかなか次の言葉が続かないっていうか。で、いろんなうまくいかなかった時に、怒ったり黙ったりしていると「何を怒ってるの？何が悲しいんだ？」ってすごく言われて。そういうのじゃないんだけどって余計黙っていると、みんなで噂されたりとかして、怒れば、次は何かあいつ怒っているとか言われたりして。そういったことに 1 人で悩んでいたなと思います。それが、半年、1 年たった頃に調子が上がったのは、ちょうど専門家の方、橋本さんの前の小島さんという第 1 フェーズのホンジュラスの専門家なんですけども、その方が「演劇をやったらいいんじゃないか、啓発活動で演劇をやったらどうか」という提案をされたんですね。協力隊とか、貧しい国の写真というと、子ども笑顔というのがあると思うんですけども、任地にいてすごく感じたのは、本当に貧しい人たちって笑顔がないということです。子どもたちは、全然笑わないし、黙ってじーっと見ているだけな

んです。女性だったら家の中にずっといるだけで、何も楽しみがない。それなら私たちが演劇をしたら、楽しんでもらえるんじゃないかということで、私の同期と、面白おかしく、現地の人が好むドタバタ劇や恋愛劇の内容を取り込んで作りました。演劇をやっているうちは、啓発活動ができているっていうことでやりがいがあったんですけど、その一方で、葛藤はすごくありました。その葛藤というのは、いかにも協力隊らしい活動をしているっていうことで、この活動は一過性のものじゃないか、自分で満足しているだけじゃないかと。あと、いろいろなところで活動するけども、「サシガメを見つけたら届けてね」と言うわりには、届けられても何もフォローができなかったりして。そういったことにすごく悩みました。それでだんだんバタンと落ちていきました。しかも、ちょうどこの時に第 1 フェーズが終わって、専門家をはじめ、お世話になった方々が、次から次へと帰国されて、私たちは取り残されて、どうなっていくんだろうとか、そういった不安がありました。ここでまた持ち直したのは、残された隊員 4 人で、演劇の第 2 弾を作ることになったからです。次は住居改善、つまり、サシガメがどこにいるんだろうと模擬体験で探すことができるような演劇を作ろうということで、隊員同士で協力しあったことで、またモチベーションがあがりました。同時に、私はずっと任地で走っていたのですが、大会があるごとにずっと走っていて、そういった、大会のなかでできた仲間とか、つながりとかが、活動がうまくいく時期に重なって、そういった新しい仲間やつながりができる楽しみもがでてきました。それも、走るだけじゃなくて、これ（山内さんが着ている T シャツ）は山内さんが T シャツ作られたんですが、これも着て、走って、日本人が出ているから珍しいってことで、メディアや新聞、テレビとか、そういったところに出させてもらいました。T シャツを着て走ることで JICA とかシャーガスとか、そういった啓発活動ができるんだなってことで、いろいろ工夫して活動しました。結局、演劇をやってよかったのかとすごく考えたんですけど、やっぱり現地の人々には楽しみが少ない中で笑ってくれるってところがいいなって思いました。演劇を見て、それをキッカケにして自分たちならこういう劇ができるとか、そういったキッカケ作りになったので、それはそれでなんかやりがいを最後は感じたんです。2 年間を通じて本当の意味でどれぐらい自分ができたのか、やっぱり帰国して 1 年 2 年たってからじゃないと分からないなと思って、最後はこういう形で、ちょっとモチベーションが下がりました。以上です。

橋本　ありがとうございました。では、続いて江越さん。

江越　私は、大きく分けまして 2 カ所の凹みがある、そういったグラフを描かせていただきました。初めは、グアテマラに赴任して、これは 2009 年の 12 月の末ぐらいなんですけれども、最初の 1 カ月は語学訓練がありまして、非常にやる気満々、なにしろ会社辞めて参加してますので「やるぞ！」というような感じで、赴任したわけです。でも、いざ語学研修が終わって任地に行きますと、カウンターパートという、いわば受入先、配属先の窓口といいますか、一緒に仕事やるパートナーですね、その方が迎えに来てくれて、「明日からやるぞ！」という時に、カウンターパートは「俺は明日からバカンスだ」と(笑)。戻ってくるのは 2 カ月後だと言われまして、一気にやる気が下がりました。それだったら、わざわざ早く派遣される必要なかったんじゃないかと、非常に凹みました。それでも、その間、いろいろ自分なりに（置かれた）現状の把握とかを進め、そうこうするうちにカウンターパートも復帰しました。そのキッカケとなったのは、専門家のプロジェクトが動き出し

たことです。（流行地住民の）血清の調査というのが始まり、それにつれて、いろいろ課題といいますか、やれる活動の幅が広がっていきました。実際に、私の住民啓発とかそういった活動というのは、集落に行かないとなかなか進まない、集落に行ってナンボ、住民の方に会ってナンボだと、いうような活動でしたので、その集落に行くことができれば、日々の浮き沈みはありますけれども、比較的活動ができたということになります。例えばサシガメを探す調査というのがありますが、こういった啓発の教材がありまして、これを片手に、いろんな住民の方々に啓発をするような活動とかです。（グラフ中の）この辺（の時期の活動）は進んでおりました。で、もう 1 回ここで凹んだのは、2 年目の年に、非常に私の配属のあったチキムラ県というところは問題がいろいろありまして、端的に言えば、私の同僚らが皆さん契約職員というような弱い立場の人ばっかりだったんですが、予算がないからとみんなクビになりましてですね、私とカウンターパートだけになりました。劇団ひとりみたいなそんな状況で、これじゃ何もできないと。運転手もいなければ集落まで行けない。そういうような状況になりまして、ここでまた沈んだわけです。何をするにも困った、という状況になったんです。そんな中ででも、自分なりにできること、自分の配属先でできること、また、やっぱりクビになったといっても、次また仕事の契約がまた復活するかもしれないと言って集まってくる同僚らもいましたので、そういう人たちと一緒に、教育というとあれなんですが、いろいろと自分のできることをし続け、そうしてるうちに、少しずつ状況も改善されました。また、橋本さんが短期専門家として来られた時に、そういう状況でなかなか人的・予算的な制約があるのであれば、キャンペーン的なことをやったらどうかというアドバイスもいただきまして、そのキャンペーンをするお金というのもなかなかなかったんですけど、ちょうど、日本だとワールドビジョンっていうんでしょうか、Visión Mundial という NGO で、ちょっとお金を出してくれるところがありましたので、そういうところの協力を得て、ちょっとしたビラを作り、キャンペーンで、早い話が「サシガメを見つけて届けてくれたら、景品が当たる、かもしれない」というようなもので(笑)　ちょっと釣ってみました。言わば、自分らでサシガメの啓発に行くよりも、住民が積極的に探してくれたほうが、費用対効果がいいのではないかというようなことをやりはじめました。そして、（グラフでは）ずっとこうきまして、大統領選という、ちょっと、なかなか日本ではないような、政治的不安定な要素もあり、活動もスムーズにはいかなかったんですけれど、モチベーションも上がってきて、最終的には 100％まではいかなかったものの(笑)、　こういったことをやって自分のカウンターパート、同僚らもなんとなくこういう方法もあるんだなということを学んでくれたようなので、自分としては、やる気っていうか、気持ちは満たされたかなということで、このような（グラフの）終わりにさせていただきました。

谷口　私のグラフはこちらになります。私が行った時には、やる気はすごくたくさんあるんですけど、これは、一緒に仕事をした同僚たちが、15 人のおじさんたちだったんですが、私が行った時に

は、皆さん、代わる代わる毎日声をかけてくれて。15 人のおじさんたちがそれぞれ、今日はここに行こう、明日はここに行こうっていう感じで、すごくシャーガス病対策に力を入れていたので、これから 2 年間すごくいろんなことができるんじゃないかな、というので、すごくやる気が高かったんです。それが 3 カ月ほどして、15 人の人たちがだいたい 3 回ぐらい周期が回ったぐらいから、皆さん、もういいやって感じになっちゃったんですかね、全然、声をかけてくれなくなってしまって、私が声をかけても「今日は雨だから」とか、「今日はデング熱の対策があるんだ」とか。「今日は車のガソリンがないんだよ」とか、そんな感じで全然皆さん、シャーガスのことをやってくれなくなってしまって、ここですごくモチベーションが下がりました。これからどうしようかなと、モチベーションが下がったんですけども、2 人だけちょっと見込みがありそうなおじさんたちがいたので、このおじさんたちに「これから、住人たちを巻き込んで、シャーガス病の監視体制を作ろうよ」と言ったら、この 2 人が「よしやろう！」ということで、虫対策をする、専門外の人たちにも、つまり住民たちにも声をかけて監視体制を作ろうっていうことで、そういった人たちを対象とした講習会を開いたりして、2 人がすごくやる気を出してくれたんですね。なので、私も、これからまた頑張るぞとモチベーションが上がったんですけども、実はこの講習会、この虫対策のおじさんたちが、自分たちがシャーガス病対策をするんじゃなくて、もう住民たちでやるんだぞ、俺たちはもうやらないぞ、というような、そういう講習会の内容になってしまったんですね。なので、住民の人たちや、虫対策を専門としない医療職の人たちと、虫対策を専門とするはずの人たちの間のケンカの場となってしまったのです。その場に私も使われてしまったというか、現地の人たちから「翠はどっちの味方なんだ！」みたいに言われて。そういうケンカの場を作ってしまうことになってしまって、モチベーションがすごく下がってしまって、これから残った期間、どういった活動をしようかなとすごく悩んだ時期がここです。で、この時期には、思いつくままにいろんな活動をいろいろやってみたんです。学校を回ってみたりとか、教育省に声をかけてみたりとか。それから、アンケートをやってみたりしました。そのアンケートの集計をしてみたら、意外と皆さん、どうやって活動したらいいのかとか、どうやって散布器を使ったらいいのかっていうことを分かってないっていうような結果が出ました。なので、残った期間、最後帰る前にもう 1 回アンケートをして、その時にこのアンケートのクイズをして、その時の正答率が上がるように活動をしてみようと思いました。いろんなシャーガス病に対して、どうやってみんなが活動すればいいかっていうような、手順書を作ろうと考え、残った期間は、その手順書を作ったり、その手順書にしたがってみんなが動いてくれるようなシステム作りをしたり、というところに力を入れました。最後の 1 年間は、何をしたらいいか、どういうところを目指そうかっていうところがハッキリしてきたので、自分のモチベーションがすごく上がってきました。最後、帰る時には、もっといろんな活動ができたんじゃないかなとか、これからこういうこともっとしたかったなっていうのが、すごくあったんですけども、そんな 2 年間でした。

小笠原　私の図はちょっと谷口さんと似ていると思います。最初、80％スタートぐらいですね。かなりやる気もあって、見るものが全て目新しいというところで、毎日充実していたと思います。しかも、私が赴任した時に、プロジェクトもそのコパン県というところだったんですけれども、そこでちょうどスタートするというところで、同僚たちのやる気もすごくあって、サクサク進んでい

ったというところで、最初は良かったんです。それが徐々にその、中南米っていうのは、ストライキが多くて、特に公務員なんかで給料上げてくれっていう形で、ストライキ 2、3 週間続くんですけども、それがだいたい 2 年に 1、2 回あって、そういうことがあると、なかなか仕事も進まなくなっていって、赴任 1 年目ぐらいになって下がってきたかなというところです。あと、私の場合、カウンターパート、一緒に仕事をしてたカウンターパートがちょっと問題があるといいますか、私にはすごく良くしてくれたんですけども。組織の中でうまく上司に取り繕ってやっていくタイプではなく、上司とすぐケンカをするようなタイプの人だったので、そういったところで、実行部隊であるカウンターパートがその上司とケンカばかりしているという状況で、プロジェクトとして、なかなか最初のころに比べると、あんまり進まなくなった。例えば、サンプル活動なども滞ってたりして、そこで私のやる気も一緒にドンドン下がっていったというところです。で、そこからちょっと上昇気流に乗っていくんですが、理由は二つあります。一つは、カウンターパートがシャーガス病の担当から降りて、別の人になったというところです。代わった人が、媒介虫対策にすごく熱心に取り組んでくれる方だったので、そこで一緒にいろいろなことをやっていって、私のやる気も上がっていった。あともう 1 点は、江越さんもおっしゃっていましたが、サシガメの捕獲キャンペーンみたいなことを私もやろうかなと思いまして、実際、5000～6000 人が住んでいるような村で、2 週間という期限を使って、この 2 週間で自分の家の中にいるサシガメを見つけて、それを保健所に届けてください、届けてくれたあかつきには、その届けてくれた人の家を散布しますという特典を付けて、やっていました。攻撃フェーズですね。シャーガス病っていうのは、攻撃フェーズとメンテナンスフェーズの二つのフェーズで成り立っていると思いますが、そのメンテナンスフェーズの最初の部分にかかわることができたっていうところで、最後は 80%くらいの感じで、活動が終えられたのかなと思います。以上です。

《同僚との信頼関係構築の過程》

橋本　ありがとうございました。お話を聞いていると、いくつかの段階があるようです。皆さん、最初はすごくやる気が高くて、そして、どこかで凹む時期があって、そして、それに応じて上がっていくという時期もあると、そういう流れが見られると思います。まず、最初の段階で、いろいろとご苦労をされたと思うんですが、例えば、同僚との人間関係作り、コミュニケーション、あと自分の居場所作り、よそ者なので、入ってすぐに戦力になるっていうのは難しいと思いますが、それに行きつくまでの時間には、苦労っていうのはあると思うんですけど。それについて、比較的入りやすかったっていう方はいますか？逆に、難しかったっていう方は？

山内　私の場合は、前任者、前に同じ任地で活動していたボランティアさんがいたので。彼女がもう、人間関係構築していてくれていたんですよ。ですから、それにしたがって彼女からも、あの人には注意したほうがいいとか、いろんな情報をもらっていたので、やりやすかったと思います。ただ、これはどの方にも当てはまることではないと思います。

橋本　ほかに、入りやすかったという方は？

谷口　私も、もう 5 人目のボランティアだったので、もう日本人はどんなものかとか、そういったこともよく知っているというか(笑)、そういう人たちだったので、入りやすかった部分はあります。ただ、5 人目だったので、よく名前を間違えられ

たりですとか、日本人はみんな同じ顔に見えるとかいうことでちがう人と間違えられたり、前のほうがスペイン語上手だったねって言われたりとか(笑)、そんなことはありました。

小笠原　私は新規隊員だったので、私の任地に入ったのは私が最初だったんですけれども、その前から別の地域に入っている隊員の方がいまして、そういう方とかからこういうところに気をつけたほうがいい、具体的には、同僚をみんなの前で叱らないとか、同僚の人たちっていうのはシャーガス病だけをやっているわけじゃなく、マラリアとかデング熱の活動もやっているので、そういった活動にも一緒についていって、微力ながら助けをするっていうふうな形で、仕事をやっていたので。それなりに好意を持ってというか、信頼をされながら、活動はできたのかなと思います。

《印象に残る出来事》

橋本　はい。だいたい、ま、いろんな活動の中で、最高潮の時があって、最低値があると思うのですが、すごく印象に残ったエピソードといいますか、この瞬間で火がついたとか、先ほど一部おっしゃられた方もいらっしゃいますが、どういう瞬間だったかお話いただけませんか。

山内　火がつくとか、そういう衝撃的なものではなかったんですが、1 年過ぎたぐらいから、自分の視点が変わってくるのを、じわじわ感じはじめたんです。最初、自分中心でものごとを見て、周りを動かそうとしていた。それが、私の場合は、あそこでどん底になってますが、うまくそれでいかないことで、気がついて、逆に自分から押すのではなくて、引いてみる。相手のことを聞く、とか、相手の動きに応じて自分も動いてみようとか。相手中心にしていったほうがいいんだな、っていうことにじわじわ気がついていく。ホンジュラス目線に変わってくるんですよね、2 年目は。それからのほうが、割合うまくいったような気がしています。

江越　私は、最初から、主人公はグアテマラ人であってほしいという自分のスタンスがありました。なので、グアテマラ人の同僚らが動いてくれるのであれば自分も協力するけれど、彼らが動かないのであれば、自分は何もしない、ここまで言ったら語弊ありますけど、そういうふうなスタンスだったのです。サッカーで言えば、グアテマラ人がシュートはしてね、アシストはするけど、俺はシュートはしないからね、と言ってたんですね。そうすると、どうしても彼らがやらない時は何もできない、ということになったりするんですけど。この場合は、どのようにシュートする気にさせるか、火をつけるかを考えることになりました。火がつくという先ほどのお話で言えば、やはり、JICA のプロジェクトの専門家が来られる時、グアテマラではプロジェクトが 10 県で走っており、ほかの県との競い合い的なことにもなりますので、そうするとやはり彼らもプロジェクトに求められることをやらないといけなくなる。自分らの評価にもかかわる部分もありますし、彼らに火がつけば自分も火がつくという感じでした。

《2年間を振り返ると何点？》

橋本　ちょっと補足説明させていただくと、プロジェクトには、半期評価会といって、だいたい 6 カ月に 1 回ずつくらい、プロジェクトを行っている県、または近隣の県の対策担当者を集めて、評価会をやるんですね。過去半年間どういう活動をしてきたか、または、どういう成果を、何をやって何をやってないのか、その場がおそらく一つの競争意識を高める、または火をつける、という場になったのかなというふうにお話を聞いていました。最後ですが、皆さん上り調子で終わっている。

溜さんがちょっと下がり調子だったかなと思うんですが、2 年間を総括して、100 点満点で言うと何点ぐらいですか。皆さん、1 人ずつ。

山内　かなり 100 点に近いところを自分ではつけます。

橋本　簡単に理由を・・・

山内　もしこれが帰国の 2 年ではなく、そこから 3 カ月前だったら、多分 20 点ぐらいだったと思うんですが、やはりその最後に自分の足でまわって、住民の目線に近いところでものを見て、住民の実際の生活に触れて、生の声を聞いて、それを伝えることができたということが、自分が望んでいた活動でもあり、カウンターパートにも何か大事なことに気づいてもらえたのかなというふうに感じていて。描いていた以上のことができたという実感として、自分の中に残っています。

溜　私は、今であれば 9 割ぐらいかなと思います。いつも帰国する時に橋本さんが同じ質問をされていて、私は帰国前には確か 8 割って言ったような気がするんですね。あとの 2 割は帰国してから、それがどうなるかっていう感じで、答えていたと思います。帰国してから、だいぶたったんですけど、去年、ちょうどホンジュラスとか中米に行ってきたんですね。隊員時代、ホームステイ先の家族とあまりうまくいかなかったりしたんですけど、やっぱりお世話になったなって気持ちはずっと残っていて、去年、任地に行ったときは 5 分ぐらいしか寄れなかったんですけど、でもやっぱり来てくれたことを喜んでもらえて、隊員時代は関係がうまくいっていないと感じていたんですが、受け入れてもらえていたんだなとすごく感じました。あとは、カウンターパートにも会ったりして、私が現地にいた意味というのが少しでもあったのかなと感じることができました。ということで、最終的には 9 割 5 分くらいかな、と思います。

江越　私の場合は 8 割くらいかというところです。最終的には自分自身がナンボやれる範囲のことはやって満足したとは言っても、私が帰って来たあと、それが今現在も続くのか、本当に自分のやったことが感謝され、認められているのか。もしそれがそうなっていれば、自分も良かったなということで、満たされ、満足度も上がるんですけれど、自分自身のやったことが単なる自己満足で終わっているんであれば、その時は満足していても結局、長い目で見たらどうだったんだろうとも思えるので、ちょっと評価しにくいんです。ただ、私自身、去年の 8 月から今の仕事をはじめているんですけれど、その直前に一度、就職してもうしばらくは中米に行くのがなかなか難しいということで、フラッとグアテマラに遊びに行きました。その時は同僚らが非常に感謝してくれていて、ケン（私）がやったのがこうなってるとかいろいろ言ってくれました。私が最後に日本に帰る前に、ちょうどカウンターパートがバカンスに入るところだったので、メッセージをホワイトボードに書いて残したんです。こういうことやんなきゃだめだ、ああだ、こうだと、いろいろ書いたんです。そしたら、ちゃんと、ホワイトボードなんてそんなにいっぱいあるわけでもないのに、そのホワイトボードはまだ残していて、「お前のメッセージをまだここに残してる」と。このようなことも言われたので、そういう面では多少、自分の存在というのは評価してもいいのかな、というところで 8 割以上あげてもいいかなと思いますけど。取りあえず自分では 8 割と思います。

溜　チキムラ県ですよね？

江越　はい。

溜　ですよね。ちょうど思い出したんですけど、私、去年ホンジュラスからグアテマラのチキムラ県にバスで入ったんですね。その時に、たまたま隣で話しかけた方が教育省に勤めていて、私、ホンジュラスに住んでたんだよねって話したら、「あ、日本人は JICA でシャーガス病の対策とかすごくチキムラ県でやってくれている」っていうのを、私は、別にシャーガスとか JICA とか言ってないんですけども言ってくれました。それを聞いて、私それにまさにかかわってたんだよ！って、すごい熱くなって。なんかすごくうれしい思いをしたのですが、それは江越さんの・・・

江越　いえいえ(笑)　私も 5 代目ぐらいで、しかも、今日後ろのほうにも（同じチキムラ県で活動した隊員が）いらっしゃってますけど、1 人だけの評価ではない部分がありますので。でも、そうやって活動が根付いてるっていうか、そういうふうに、そういう活動があるんだと思ってくれてる人がいるっていうのは、ありがたいですね。

谷口　私も8割ぐらいかなと思います。2年間は、自分の足でいろいろまわったり、なかなかこう、ちょっと引っ込み思案なところもあるけれど、頑張って勇気を出してやってきたりっていうところで。自分では勇気を出していろんなことをやった、そうやったことで、現地の人たちが声をかけてくれたり、すごく自分の中で心に残る活動ができたっていう意味で 8 割です。必死になっていて、本当にまわりが見えてたかなっていうところ、最後、これもやらなきゃ、これもやらなきゃという感じで必死になっていたんですけども、本当にその人たちのためになったのかなとか、その人たちが見えずに活動していた部分があるんじゃないのかなっていうところが、2 割です。今も、現地の人たちからたまに、こういう活動しているよといったメールが来るんですけども、自分がやったことがどれぐらい残ってるのかなっていうのは、聞くのはちょっと怖いなと思ったりします。

小笠原　私も 8 割ぐらいで。私がいた時に、プロジェクトの専門家をされていた方がおっしゃっていた言葉で、「隊員活動において、仕事において、隊員と専門家の一番の違いは何か？」と言われて、うまく答えられなかったんですけれど。隊員はいくらでも失敗できるというか、どんどん失敗していける。でも一度専門家になったら、失敗は許されないんだ、評価される立場になって、失敗していたら次仕事が取れなくなる、ということをおっしゃっていて。それで、私は 8 割くらいかなというのがあったんですけども、もっと失敗を繰り返して、もっと開発途上国での経験を積めれば良かったなっていうところが残りの 2 割であります。

《帰国隊員の今》

橋本　ありがとうございます。隊員活動を、皆さん 2 年間やられて、現在就職なり、就学なりされていると思うんですが、それを含めて、今、選ばれた進路、そして、隊員の経験がどのように生かされているかについて、簡単に 1 人ずつ教えていただけますか。ありますか？反対まわりで行きますか？それでは小笠原さんから。

小笠原　冒頭で自己紹介の時に申し上げたとおり、もともと留学をしようと思って、協力隊員になって現場経験を積んだんですけども、ホンジュラスの赴任が終わってから、公衆衛生の勉強をするためにオランダのほうに行き、公衆衛生の修士号を取りました。そのあとは開発コンサルタントとして約 3 年間働いていて、今は JICA のジュニア専門員というポストで、人間開発部というところで仕事をしております。シャーガス病っていうのは貧困層の病気って言われていまして、シャー

ガス病対策をやることイコール貧困層に届くような活動ができる。それが私の中の国際協力の基礎になっています。今、JICA のスタッフとして働いていますが、その目線は持ち続けようかなっていうのはあります。正直な話、なかなか難しいんですけれども。でもなるべく、一番貧困層であるとか、社会的弱者のために、直接的な支援ができるような、案件とかを持っていきたいなと思っています。そういう意味では、感染症対策のシャーガス病対策から非常に受けた影響は大きいのかなと思っております。

谷口　私は帰国して、ちょうど１年ぐらいになりますが、今は、治験コーディネーターという仕事をしています。これは、現地で仲良くなった人の中に慢性のシャーガス病の方がいて、もう私は死ぬしかないんだよみたいな話をしてくれたことがあったんですけども、そんな中で「シャーガス病の薬ってないの？」とか、そういう話を何度も聞くことがあって、帰ってから新しい研究がどんどん実用化されるほうに貢献できたらいいな、なんか人と人をつなぐ仕事ができたらいいな、ということで、新薬開発の時に、製薬会社ですとか、患者さん、医療機関をつなぐような治験コーディネーターの仕事をしています。それから、帰ってからも、一応は中米にいた人間として、またシャーガス病にかかわった人間として、日本でそういった国際協力ができないかなということで、日本で南米のシャーガス検査というのをしているところでお手伝いをさせてもらったり、それから、医療通訳というボランティアがあるんですけども、そちらで、日本にいる中米の方ですとか、南米の方が医療を受ける時に、お手伝いができたらいいなと思い、医療通訳のサークルに参加して、そちらで勉強しています。将来も、そういった日本でできる国際協力ができればいいなと思っています。

江越　私の場合は、昨年の 8 月からプラントを作っているエンジニアリング会社に入社しました。将来的には途上国を含めた国際協力をしつつ、日本の技術を海外に、というようなところで、日本と海外、両方に貢献できるようなことをイメージして、今の仕事を選びました。正直、シャーガス病の流行地というのは、非常に貧しくて、薬やなにかも全然行き届いてない地域がいっぱいあります。自分の今選んだ会社がどういう形で貢献できるかというのは、まだ自分自身入社したばかりで難しいところはありますが、今後、途上国、低所得の国々にも、例えば製薬メーカーさんとか、いろんな（メーカーの）工場の投資がどんどん進んでいく部分もありますし、資源国への進出というのも盛んになってきていますので、そういうものをお手伝いすることを通じて、貢献していければいいと思っています。正直、青年海外協力隊に行かなければ、そういう世界、海外というのを視野にした会社を選ばなかったと思うので、それがいいかどうかは分かりませんけど、青年海外協力隊があっての、今の自分の進路なのかなというふうに思っております。

溜　私は、実は今日知ったんですけど、谷口さんと同じで、会社は違うのですが、同じ治験コーディネーターをしています。帰国して、正直、就職かなり厳しくて、新卒で行ったっていうことで、やっぱりすごく厳しんですね。就職できる場所はってなると本当に限られてきて、それで治験コーディネーターに行き着いたというのは確かにありました。実際に仕事をして思ったのが、製薬メーカーとか患者さんとか人とかかわる仕事なんですが、いろいろとシャーガス病の経験が生かされているかなと思います。病院内での流れを作るとか、治験のことを何もしらない患者さんに接するときとかに経験が生かされていると感じます。医療従事者は後ろ向きな考え方が多いのですが、よく橋

本さんも言っていたんですけど、なんでこの人はこういった言葉を言ったんだろうと考えたり、怒っている人がいれば、取りあえず受け入れて、なんでこの人は怒ったんだろうと考えたりして、そういうことは、シャーガス隊員だったことがいい経験として生かされているんだろうなと思います。

山内　今の4名の方を聞いていると、派遣前からの専門領域があったり、目指していたことがあったりして、そこにつながっていくような形で帰国後の進路を選んでいるのかな、というふうに感じました。私は前職が郵便局でしたし、特に特技らしいものもなくて、帰って来て、直前までかなりマックス状態だったので、しばらくぼんやりしてしまったんです。それで、ちょっと逆カルチャーショックといいますか、身動きが取れなくなってしまいましたところ、派遣前に、協力隊員になる人が長野県の駒ヶ根市で訓練をして行くんですが、そこの訓練生のお世話、訓練スタッフをやらないかという話をいただきまして、そちらに流れに身を任せて入り、結局3年間、派遣前のボランティアさんの生活まわりと言いますか、管理であるとか、事務作業であるとか、講座を担当したり、そういったことをしておりました。ある意味、学校のような感じだったんですけども、そういった経験をしまして、「ああ、そういえばなんか私、学校の先生とかほんのりなってみたかったことがあったなあ」と思い直しまして、今、通信教育で小学校教員の免許取得に向けて勉強しております。来年、教育実習に行く予定でおります。任国に異質な存在としてポンって入って、周りの人と活動を進めていく。それは、学校の教員も同じような感じかなと思い、20代の時にほんのり思って憧れていた時とはまたちょっと幅の広い自分として、あらためてその目標に向けて歩めていけてるような手ごたえを、今感じているところです。

橋本　ありがとうございました。ということで、クロストークはひと通り終わらせていただきたいと思います。

4. 質疑応答

司会（地球ひろば）　ではこのあと、お話しいただきましたシャーガス病のプロジェクトやシャーガス病のことに関して、また、今日5名の元青年海外協力隊員の活動などを、皆さんにお話しされましたけれども、それに関する全体の質疑応答などに移りたいかと思います。可能な範囲内で結構でございますので、ご所属とお名前、また誰に対する質問なのかをよろしくお願いします。きょう大勢いらっしゃいますので、もし質問があがりまして、同類の質問でしたら、併せてその際にですね、ご質問を承りたいと思いますので、この時間少し利用して、全体の質疑応答に移りたいかと思います。どなたか、質問や意見ある方いらっしゃいますでしょうか？　いかがでしょう？　それでは前の男性の方。お願いします。

質問①　清水と申します。私も協力隊OBなのですが、今はコンサルタントをやっています。私の時と違うかなと思ったんですけど、皆さん2年で終わられていると。延長ということが可能だったか、可能であったら希望されたのかどうかっていうのを気になったので、その辺は橋本さんに聞いたほうがいいのかなと思うんですけど。満足度ということでは皆さんかなり良い満足度を出されていますが、そういったことも考えたのかなというちょっと、教えていただけると助かります。

橋本　すいません、同じような質問をお持ちの方、任期とかそのようなテーマで。よろしいですか？延長された方いらっしゃいますか？第2回戦をさ

れた方は？

溜　第 2 回戦というのは、延長ではなくて、いったん帰国してからです。私たちの時の流れはいったん帰国して短期ボランティアという形で戻ってくるパターンが多くありました。私の場合もそういった形で、短期として、ポストは同じシャーガス病対策だったんですが、長期ボランティアは田舎で、2 回目の短期は首都の NGO に入ってシャーガス病対策に携わりました。でも小笠原さんの場合ちょっと違いますよね。

橋本　小笠原さんぜひ・・・

小笠原　私の場合は、同じ任地に戻ってきたということですね。そこだけですね。半年だったんですけど、延長期間は。

溜　私は 10 カ月ですね。

司会（地球ひろば）　よろしいでしょうか。ほかにどなたかご意見ご感想でもかまいません、前からマイク渡します。

質問②　すいません、私も OG なんですけれど、南米におりました。私も臨床検査技師で、派遣は大学で実習の指導をしておりました。ちょっと、テクニック的みたいなところで誰でも結構なんですが教えていただけたらありがたいんですけれど、シャーガスを撲滅するというか、殺滅するために、殺虫剤をお使いになってるってことなんですけれども、耐性ができたりとかっていう心配はないのかっていうのが 1 点と、あと、私もシャーガスの検査とか大学のほうでやっておりましたので、かかわってはいたんですけれど、シャーガスの感染って、夜、天井からパーンと落ちてきて、吸血されて、パンプされて、吸い込まれてみたいな形で感染するかと思うんですけれど、感染を防御するために、例えば蚊帳とかっていうものが効果がないのかなと、ちょっと考えたのですが、それを教えてください。

橋本　私が回答させていただきます。まず、耐性に関しましては、今のところ南米の一部の地域を除いて、南米のグランチャコ、ボリビアの方なんですけども、ほかは耐性は殺虫剤に対してはできていません。というのは、サシガメのライフサイクルがだいたい 1 年から 2 年なんですね。卵から実際に大人になって、死ぬまでが。だいたい殺虫剤の耐性ができるまでは、同じ殺虫剤に 10 ジェネレーション続けて、曝露するといいますか、同じ環境で生活を続けて、殺虫剤を受けた上でだんだん形成していくという流れなので、ライフサイクルの長い話。あと、種類にもよるんですけれど、外来種っていう消滅可能な虫は、さらにもともと南米からきてまして、それがあるところで突然、繁殖し拡大したというんですね。虫が増える時はボトルネック現象といいまして、いろんな能力を失うんです。その一つとして殺虫剤に対する抵抗力を失っていったっていう印象があります。あともう一つ、蚊帳ですね。蚊帳に関しましては、今のところ、対策としては取られていないんですね。でも、そもそも殺虫剤散布が効果があると、コスト的にもっていうのが実証されて、それが南米で行われてきたので、それが中心として続けられてきたんですね。

司会（地球ひろば）　ほかにどなたかいらっしゃいますでしょうか。ご意見やご感想でもかまいません、いかがでしょう？　マイクお願いします。

三浦　日赤の感染解析の三浦ですけども。今の蚊帳の件でちょっとコメントいたしますけれども。ボリビアの場合には、リベラルタという日系のい

ちばん古い移住地ですけれども、あそこはどちらかというとマラリア圏のブラジルとの国境のところで、マラリアを中心に考えてあそこでは昔から蚊帳を使ったんですね。ところが、サンフアンとかサンタクルスといった下の方へ行くと、マラリアは比較的少なかった、中でも。で、それをやらなかったっていう経緯があって。リベラルタから来た方は、ほとんどがネガティブ。それは蚊帳を使ったから防げたという一つの実証で、下のほうでは蚊帳は使ってはいたんだけども、そんなに大した、しっかりと蚊帳をやるということはなかったんで、サンタクルスからの方が一番日系では感染者が多いということですね。あとは、蚊帳云々で言うと、飛んでこないですよね、普通ね、サシガメというのは。ほとんど感染のチャンスというのは、幼虫から成虫に至るまでの、その幼虫の段階でほとんどその壁の際にいて、成虫になっちゃうと飛んでっちゃって。これはまた、外から飛んでくるとかなんとかありますけども、やっぱりわれわれが一番コンタクトするのは、幼虫の飛ばない幼虫なんですね。それがたまたまベッドの脇にいるとか、缶のうしろにいるとかということでもって入ってくる。こういうのはあまり蚊帳っていうのでは防げない。

質問②　サシガメは飛んできて、人に襲わないのですか？

三浦　そうですね、あの連中は結局、吸血するためにもぞもぞ入ってきます。網目くぐってくるわけじゃなくて(笑)

質問②　結局隙間からベッドに入るサシガメを防げないのですね？

三浦　そうですね。もちろん、ストンと上から、落ちるのは防げるかもしれません。

質問②　ありがとうございました。

司会（地球ひろば）　ほかにどなたか、いかがでしょう。ではこちらからマイクをお渡しします。

質問③　ご講演ありがとうございます。虎ノ門病院に勤務しています渡辺と申します。どの方でもよろしいんですけれども、住民の方々に、啓発活動とか、シャーガス病について、対策するべき病気であるんだよっていうことをやっていく上で、協力隊の方々が活動されたことに対する、住民の方々の反応っていうのはどういう感じだったのか、お聞きしたいです。

江越　私の個人の意見ということになってしまいますが、本当に、さまざまな啓発をして、啓発の仕方、いろいろあると思うんですけれども、たいてい「サシガメは危険です。もし見つけたら殺さないで、届けてください」、「届けてください、われわれが後日、家を殺虫剤散布に来ます」とか「レスポンスします」ということを言って啓発をするんですけれども、それが守られない。住民は啓発した通りに届けてくれるのに、ガソリンがないだ、それこそストライキだという事情で、そこにレスポンスをなかなかしない。それを怠ると、やはり住民からしてみたら「なんだよ、届けたのに」と。それで、信頼関係が築かれないと、やはり啓発してもなかなか響かない部分もあったりするんです。住民の反応は悪くなってしまう。一方で、小学校みたいな、学校とかで啓発をすると、結構子どもたちはサシガメを宝探しのように興味を持って、子どもらしく無我夢中で探すという感じで、わりと反応が良かったです。啓発する時は学校でやるのがいいというのを、同僚とかも認識している状況がありました。実際に学校でする機会、出動できる機会はなかなかなかったんですけ

れど。ちょっと、そういうような啓発が、私がやった範囲では有効だと思いました。

山内　いま、江越さんが話していたように、子どもの食いつきは良かったなという印象は受けています。そして、私が家庭訪問をした先住民の村で、各家屋を訪れた時の感想なんですが、それまでもよく訪問していたんですね、その時によく関わる人、話をする人、中心部に住んでいる人なんかは、わりと反応よく、こちらが求めている以上の知識を伝えてくれるんです、逆に。ですが、村の中でも村のはじっこに限らずなんですが、連絡の行き届かない家族、家庭とか、そういったのがあるんですね。日本でもそういったところあると思うんですが、関係が悪かったりとか、そういうところで、同じ一つの集落でも、伝わりやすいところと伝わりにくいところ、それによって、ボランティアの活動を快く受け入れるところ、そうでない、かたくなに閉ざしているところ、というような、温度差といいますか、違いっていうのは見えてきました。多分これは、先住民の集落に特に顕著なんでしょうが。ほかの集落でも、多かれ少なかれあることではないかと感じています。

小笠原　直接質問の答えにはならないかもしれませんが、私が最初 2004 年にサンタ・ロサ・デ・コパンというところに入った時には、住民の人たちは「なんとなくあの虫は悪い」という知識はあったんですけども、それが何を引き起こすのか、っていうところは分かってなくてですね。で、2 年間活動して、そのおかげなのか、プロジェクトのおかげなのかよく分からないんですけど、あのサシガメがシャーガス病という病気を引き起こして、それがいずれ死にいたる病気であるっていうふうな知識は、住民の人たちにはついたのかな。もちろん、地域によりますけれども。そういう印象を受けてます。

司会（地球ひろば）　よろしいですか。はい。ほかにどなたか、ご意見やご質問などある方いらっしゃいますか？　ではうしろへ、マイクをお願いします。

質問④　JICA 研究所の山田です。皆さんの隊員報告書を読ませていただいて、今日のお話を伺って、隊員報告書で書かれていることと、すごくよくマッチしていると感想として思いました。ちょっとお聞きしたいと思ったのが、報告書読ませていただいた中でよく分からなかったところなんですが、皆さん、非常に住民の啓発っていうのを、おっしゃってると思うんですけれども、これは、シャーガスの隊員だけじゃなくて、住民と接している方々、例えばほかの隊員とか、あるいは NGO とか、そういう住民と接している方に、いかにシャーガス病というのを意識づけするかということもあるのかなと思ったんです。今日のお話伺っていて、江越さんは、確か NGO と連携、ちょっと一緒に何かやろうとしたという話を先ほどされていたと思うんですけれども、もう少し、ほかの方でも、ほかの隊員とほかの職種の隊員とこんなことやったとか、あるいは、現地の住民と接しているようなローカルの NGO の方とこんなことやったとか、何か具体的な例があったら、2、3 紹介していただければと思います。よろしくお願いします。

江越　私自身は先ほど、NGO に少し協力いただいてキャンペーンをやったというお話をさせていただきましたが、例えば、今日聴講に来られている古田さんっていう、グアテマラの同期で別の県で活動された方は、テレビやラジオといったものを活用して広く宣伝されたり、あとは日本文化紹介という、ほかの職種の方も含めて日本人が 30 人 40 人といる、グアテマラという国単位で日本のイベントをすることがあったのですが、そういう時に、また古田さんが発起人となってシャーガス病の啓発をしようということで、タイアップ的にした例とか、あと、私は、結局ポシャったんですけれども(笑)、民間のバス会社にですね、ちょうど流行地を走るバス会社がありまして、そこにかけあって、ちょっと車内とかに啓発の資材を置かせてもらったり、あるいは届出のちょっとした啓発的な一つの起点として協力いただけないかというような話を持ちかけたこともありました。グアテマラという中米特有の、いわゆるバス会社とかはどちらかというとお金持ちの経営者がいて、麻薬絡みの、麻薬運びとか、そういうのと結構密になっているということで、カウンターパートのほうが非常に怖がってしまって、結局お蔵入りになったんですけれども。ただ、いろんな切り口は、啓発に関してはあるのかなというふうに私自身は思います。ちょっと答えになっているかどうか分からないですけど、そういった切り口がありました。

谷口　私は、ほかの職種の隊員という意味では、環境の隊員と一緒にお掃除キャンペーンをやったりとか、あと、今日こちらに飾らせていただいたんですけども、すごろくを作って、子どもたちに興味を持ってもらおうといった活動をしたりしました。また、都会の大学とかではシャーガスの話をするという機会はほとんどなかったですが、日本語教師の隊員の方に首都の大学で講義する機会を頂いて、首都の学生たちにシャーガスの話をした時には「わー、知らなかった！」っていうような声も聞かれて、とても新鮮でした。それから、地域の住民という意味では、地域のお祭りを使ってシャーガスのキャンペーンをやらせてもらいました。これは、サシガメが多く出てくる村の人たちと一緒に、サシガメをつかまえて、そのサシガメを使ってキーホルダーを作って、そのキーホルダーをお祭りで売る、というような活動です。この売り上げは、シャーガス病対策として現地の保健所の人たちに手袋を買ったりとか、そういった活動に使わせてもらいました。お祭りでキーホルダーが売れるぞっていうと、子どもたちがどんどんサシガメを見つけてくれたりして、住民の人たちを巻き込んだ活動ができたかなと思います。

司会（地球ひろば）　それでは、間もなくお時間になりますので、先ほど、中ほどで手挙げられましたので、そちらに、マイク渡します。じゃ、こちらで最後の質問とさせていただきます。

質問⑤　東大で寄生虫薬の研究をしている鈴木といいます。きょうは貴重なお話どうもありがとうございました。私は普段ラボワークがメインなので、現地でどういう状況か全く知らないんで、恥ずかしながら教えていただきたいんですけども、例えば、現地に派遣されて、サシガメに刺されるリスクっていうのがどれくらいか知りたいんですが。皆さんが派遣されて、実際に刺されたことがあるのか、あるいは、刺されそうになったという経験があれば教えていただきたいんですけど、よろしくお願いします。

小笠原　基本的に、サシガメは夜活動する虫なので、私たちは昼間活動しているので、直接刺されるということはないんです。一度、私が住んでいた家で、サシガメが見つかったことがありました

けれども、家族の人は検査を受けてないんで、どうなったかちょっと分からないです。

質問⑤　では、捕獲しようとした時に、刺されたっていうことは、そういうリスクってあるんですか。動きがすばしっこいとか。

橋本　サシガメによっては、動きの速さそれぞれ違いますけど、消滅可能な虫がけっこうすばやくて。あとはもう 1 個消滅できないサシガメは、けっこうノロノロ鈍かったりするんです。結局捕まえる時は、ピンセットで、素手じゃなくて、ピンセット、そしてまた、住民につかまえてくださいっていう時にも、ナイロン袋に手を突っ込んで、それでつかんで、ひっくり返して。その辺の最低限の注意事項を言いながら、啓発活動をしていきます。私もこの対策に 12、3 年関わってきましたが、いまだにあの、何回か検査しましたけど、大丈夫なので。はい、大丈夫です。

質問⑤　ありがとうございます。

司会（地球ひろば）　まだご質問やご意見などあるとは思いますが、お時間になってしまいましたので、このあたりで本日のセミナーを終了したいかと思います。本日は、ジャーガス病の概要やプロジェクトの模様を橋本様より、お話しいただきました。また、5 人の元青年海外協力隊員からは、このシャーガス病対策にあたっての、活動だとか、その時の気持ち、思いなどをお話しいただきました。あらためて、前にいます 6 名の皆さまに大きな拍手をよろしくお願い致します。

(拍手)

司会（地球ひろば）　先ほどから何点かお話ありましたけれども。皆さんの左側には、今日お話しいただいた皆さまからお持ちいただいた、展示物とキーホルダーやポスターなどもありますので、閉館までお時間ありませんけれども、どうぞご見学くださいませ。また出られまして右手のところでは、本日ご講演いただきました橋本様の著書の販売もございます。今日は、特別価格でお売りいただけるそうですので、どうぞこちらも皆さん、ご利用ください。また、私の方からもう一つだけご案内させてください。今日ご参加の中に、先ほども貴重なご意見いただきました、三浦様、日赤からお越しいただきました三浦様より、出られまして正面のところに、シャーガス病に関係するパネルの展示をお持ちいただきました。非常に貴重な資料かと思いますので、どうぞ皆さん、退席の際には、そちらを一度ご見学されてはいかがでしょうか。お時間になりましたけれども、あらためて、本日お越しいただきました皆さま、また、お話しいただきました皆さま、どうもありがとうございました。

(拍手)

(了)